

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 1 9 年度病害虫発生予報第 2 号について

平成 1 9 年度病害虫発生予報第 2 号を発表したので送付します。

平成 1 9 年度病害虫発生予報第 2 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	葉いもち 斑点米カメムシ類	並	2 2
普通期水稲	葉いもち スクミリンゴガイ		2 2
野菜・工芸作物全般	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや多 やや多	3 3
施設野菜	土壌病害 コナジラミ類・アザミウマ類・アブラムシ類		3 3
冬春トマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)		3
果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	4
かんきつ	そうか病	やや多	4
	かいよう病	やや多	4
	黒点病	並	4
	ミカンハダニ	やや少	4
	ミカンハモグリガ アブラムシ類	やや多 少	5 5
茶	炭疽病	並	5
	輪斑病	並	5
	カンザワハダニ	やや多	5
	チャノコカクモンハマキ	並	5
	チャハマキ	並	6
	チャノホソガ	やや多	6
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	6
	チャノキイロアザミウマ	並	6
	クワシロカイガラムシ	多	6

作物の生育状況 (5月中旬)

早期水稲は、葉齢は平年並みであるが、草丈は平年より低く、茎数はやや多い状況であった。温州ミカンは開花～落弁期、茶は一番茶収穫期であった。

6月の気象予報

向う 1 か月の天候は、前半は数日の周期で変わり、後半は曇りや雨の日が多い、気温・降水量は平年並、日照時間は平年より少ないと予想されている。

(1 か月予報 鹿児島地方気象台 5 月 1 8 日発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

- 1) イネの生育は、葉齢は平年並みであるが、草丈は平年より低く、茎数はやや多い。
- 2) 5月中旬の巡回調査では発生未確認（調査地点）であった。
- 3) 県南の一部地区で初発生が確認されたものの、病勢は停滞している。
- 4) 向う1か月の天候は、気温・降水量は平年並、日照時間は平年より少ないと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 曇雨天が続く場合はあらかじめ粒剤を水中施用するか、または葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除する。
- 2) 同一系統の薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

2 斑点米カメムシ類

[防除上の注意]

- 1) 米の上位等級確保のためには、穂揃期とその7～10日後の2回防除が必要である。
- 2) 出穂の早い、又は遅い水田には集中的に飛来する恐れがあるので注意する。
- 3) 早期米の等級格付け低下の主因はカメムシ被害によるもの（H17産では44.1%、H18産では50.6%）であるので、必ず防除を実施する。

普通期水稲

1 葉いもち

[防除上の注意]

- 1) 育苗期の発生に注意し、本田への持ち込みを防止する。
- 2) 育苗箱施薬は予防的効果が高く、本田での第一次伝染と生育初期の蔓延を防止するので必ず実施する。特に長期残効型箱施薬剤は持続効果が約80日と長く、省力的でもある。
- 3) 向う1か月の天候は、気温・降水量は平年並、日照時間は平年より少ないと予想されている。
- 4) 補植用の取り置き苗は葉いもちが発生しやすく、本田への伝染源になりやすいので補植が終わったら処分する。
- 5) 育苗箱施薬を実施していない場合、曇雨天が続くときはあらかじめ粒剤を施用するか、葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除する。
- 6) 同一系統の薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

2 スクミリングガイ

[防除上の注意]

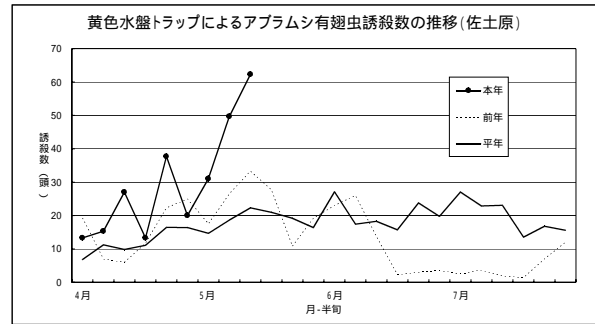
- 1) 水稲の被害は、田植え直後から3週間が著しく、その時期に深水状態ほど食害が激しいので、活着後は浅水で管理する。
- 2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を行う。
- 3) 粒剤の水面施薬に際しては、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも7日間はかけ流しや落水はしない。

野菜・工芸作物全般

1 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 黄色水盤トラップ(佐土原)による誘殺数は平年より多く推移している。

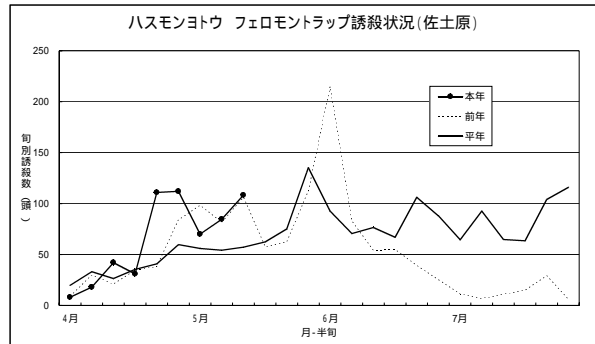


2 ハスモンヨトウ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) フェロモントラップ(西都、佐土原)による誘殺数は平年よりやや多い傾向で推移している。

(右図参照)



施設野菜

1 土壌病害

[防除上の注意]

- 1) 土壌病害のみられたハウスでは、収穫後被害残さを施設外に持ち出し焼却処分する。また、ハウス内は耕起を行って残さの分解を早めることが重要である。

2 コナジラミ類・アザミウマ類・アブラムシ類

[防除上の注意]

- 1) 近年、コナジラミ類、アザミウマ類やアブラムシ類など微小害虫によって媒介されるウイルス病(TYLCV、TSWV、CMVなど)が問題となる事例が増加傾向にある。
- 2) これらの媒介虫は、栽培終了後、野外へ拡散し、地域での密度増加、さらに次期作への主な発生源となる恐れがあるので、栽培終了後10日間程度施設を密閉するなど媒介虫の死滅を図る。

冬春トマト

1 トマト黄化葉巻病(TYLCV)

[防除上の注意]

- 1) トマト黄化葉巻病はタバココナジラミ類(シハ^レ-リ^コナジ^ラミ、タ^バコ^コナジ^ラミ^ハイ^クイ^クQ)によって媒介されるので、発病株は見つけ次第抜根し、ほ場から持ち出し埋没処分する。
- 2) 栽培終了後は、株を抜き取り、10日間程度施設を密閉してコナジラミ類を死滅させた後、残さを処分する。
- 3) ほ場周辺の雑草はタバココナジラミ類の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場周辺に持ち出したトマト残さや野良生えのトマト等には特に注意する。

果樹全般

1 果樹カメムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 県内の3地点に設置したフェロモントラップ調査のうち、県北部(延岡)で4月5半旬以降、平年を大きく上回る飛来(ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシ)が続いているが、他の地点では平年並～少ない状況である。
- 2) 県内の4地点に設置した予察灯では、県北部(延岡)でツヤアオカメムシの飛来が見られたが、その他の地点では確認されなかった。

[防除上の注意]

- 1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動する。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- 2) 成熟・着色の早い果実を集中加害する傾向があるので、今後モモ、ナシ等は特に注意する。

かんきつ

1 そうか病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 5月中旬の発生面積率20.0%(平年6.8%)は平年よりやや多、発病葉率1.0%(平年0.5%)は平年並である。
- 2) 向う1か月の天候は、気温・降水量は平年並、日照時間は平年より少ないと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は幼果期である。

2 かいよう病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 5月中旬の発生面積率5.0%(平年3.7%)は平年よりやや多、発病葉率0.5%(平年0.3%)は平年並である。
- 2) 向う1か月の天候は、気温・降水量は平年並、日照時間は平年より少ないと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 梅雨期に予防散布する。
- 2) ミカンハモグリガの防除に努める。

3 黒点病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 向う1か月の天候は、気温・降水量は平年並、日照時間は平年より少ないと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は幼果期、梅雨期であるが、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回防除してからの積算降水量300mmを農薬散布間隔の目安として予防散布する。

4 ミカンハダニ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 5月中旬の発生面積率10.0%(平年20.5%)、寄生葉率0.6%(平年2.0%)はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率 30% (1 葉当たり虫数 0.5 ~ 1 頭) を目安に防除を行う。

5 ミカンハモグリガ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 5 月中旬の巡回調査では 25.0% (平年 9.8%)、寄生葉率 0.4% (平年 0.3%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) かいよう病の発生を助長するので、新梢伸長期間中は定期的に防除する。
- 2) 成虫の活動は夜間で、日中は葉裏に潜んでいるので、樹全体の防除が効果的である。

6 アブラムシ類 (少)

[予報の根拠]

- 1) 5 月中旬の発生面積率 10.0% (平年 51.6%)、寄生梢率 0.3% (平年 7.5%) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- 1) 成木園では異常発生の場合を除いて防除の必要性はほとんどない。
- 2) 中晩柑類ではウイルス病 (C T V 等) を媒介するので留意する。

茶

1 炭疽病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 5 月中旬の発生面積率 25.0% (平年 25.7%)、 m^2 当たり発病葉 0.6 (平年 1.1) はいずれも平年並みである
- 2) 向う 1 か月の天候は、気温・降水量は平年並、日照時間は平年より少ないと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 2 番茶の萌芽期に防除する。

2 輪斑病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 5 月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 向う 1 か月の天候は、気温・降水量は平年並、日照時間は平年より少ないと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 病原菌は摘採時にできた葉や茎の傷口から侵入する。摘採後、早く薬剤散布するほど防除効果が高いのでできるだけ摘採当日に防除する。摘採後 4 日以降の防除では効果がない。

3 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 5 月中旬の発生面積率 41.7% (平年 52.5%) は平年よりやや少、寄生葉率 8.5% (平年 4.6%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。

4 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- 1) 5 月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップ調査では、平年並の 4 月 5 ~ 6 半旬頃に発蛾最盛期があり、次の発蛾最盛期は 6 月 3 ~ 4 半旬 (平年並) と考えられる。

- 2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、6月の発蛾最盛期の10日後である。
- 5 チャハマキ (並)**
- [予報の根拠]
- 1) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 次回の発蛾最盛期は6月3～4半旬頃と考えられる。
- [防除上の注意]
- 1) チャノコカクモンハマキの発蛾最盛期と10日以上差はない(ほぼ同時期)と考えられるので、チャノコカクモンハマキと同時に防除する
- 6 チャノホソガ (やや多)**
- [予報の根拠]
- 1) 5月中旬の発生面積率16.7%(平年18.3%)は平年並、m²当り巻葉数0.6枚(平年0.4枚)は平年よりやや多である。
- [防除上の注意]
- 1) 都城での次回の発蛾最盛期は6月4～5半旬頃と予想される。防除適期は発蛾最盛期の約10日後である。
- 2) 脱皮阻害剤は卵期～皮下潜葉期に散布する。
- 7 チャノミドリヒメヨコバイ (やや少)**
- [予報の根拠]
- 1) 5月中旬の払い落とし調査による発生面積率8.3%(平年20.5%)は平年より少、払い落とし虫数0.5頭(平年0.5頭)は平年並である。
- [防除上の注意]
- 1) 萌芽直後から1、2葉期を重点に防除する。
- 8 チャノキイロアザミウマ (並)**
- [予報の根拠]
- 1) 5月中旬の払い落とし調査による発生面積率66.7%(平年60.5%)は平年並、払い落とし虫数2.1頭(平年5.6頭)は平年より少である。
- [防除上の注意]
- 1) 例年、2番茶期から発生が増えてくるので注意する。
- 9 クワシロカイガラムシ (多)**
- [予報の根拠]
- 1) 5月中旬の発生面積率66.7%(平年21.5%)、寄生株率19.2%(平年5.6%)はいずれも平年より多である。
- 2) 昨年から引き続き多発生のほ場が多く、高い寄生株率の茶園も見られる。
- 3) 第1世代の防除適期は、摘採時期にあたり防除が困難であったほ場が見られる。
- [防除上の注意]
- 1) 最近、増加傾向にあるので発生を確認したら早めに防除する。
- 2) 第2世代幼虫の防除適期は幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期であるが、ふ化状況をよく観察し防除する。(平年 6月下旬～7月上旬)
- 3) 薬剤散布は、枝幹に十分かかるように適切な量をていねいに行う。

農薬散布時のドリフト対策について

- 1 ポジティブリスト制度の施行に伴い、農薬の使用については今まで以上に厳重な注意を払うことが必要です。
- 2 風の弱いときに、ノズルや散布方向、噴霧圧力などに注意して、適正な農薬散布を心がけましょう。
- 3 地域でよく話し合い、農薬の使用時期や農産物の栽培内容などを十分調整しましょう。
- 4 農薬の散布について疑問点がありましたら、病虫害防除・肥料検査センターへお問い合わせください。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
(旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬、ソルベント剤(商品名、ミックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。
- 3 発生量(程度)の区分
多 い (高 い) やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い (やや高い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない (やや低い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない (低 い) やや少ないの外側10%の度数の入る幅
(平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- 1) 予 報……向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注 意 報……主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警 報……主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特 殊 報……県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報……注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指情報について随時発表する。(従来の防除速報にあたる)

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp